

学校図書館探訪③ ～玉川学園 中学部・高等部 Multi Media Resources Center～

秋吉 和紀

はじめに 訪問の目的

主な訪問の目的については、前々節「学校図書館探訪①」に記載の通りである。中央大学附属中学校・高等学校や工学院大学附属中学校・高等学校の学校図書館の視察を終え明らかになったことは、社会的に評価されている学校図書館は、①学校全体の教育実践(特に探究の実践)との密接な関わりを持っていること、また、②「読書センター」ととどまらない学校図書館の役割を有していることである。以上の2点を満たす学校図書館の訪問ができなかったかと思っていたところ、幸運にも玉川学園へ訪問する機会を得たため、玉川学園 Multi Media Resources Center にお邪魔した。

玉川学園中学部・高等部の紹介

玉川学園は幼稚部から大学院までを擁する総合学園で、メインキャンパスは東京都町田市に位置する。創立者である小原國芳¹の「全人教育」の理念や「教育に対して何事も惜しまない」、「子供たちに本物に触れさせたい」という教育的姿勢を継承しつつ、最新の教育界の動向をいち早く捉え、SSH プロジェクト、STEAM 教育、IB(国際バカロレア)プログラム等、様々な取り組みにチャレンジし続けている。

Multi Media Resources Center(通称 MMRC、以下略記する)は、玉川学園の園児・児童・生徒のための学習情報センターであり、読書センターである²。2020 年 4 月時点で約 61,000 冊(内訳 和書:53,800 冊 洋書:7,200 冊)を所蔵している。一般的な図書館機能に加え、映像・音楽を作成できるスペースやワークショップスペースを備えている。MMRC は、玉川学園の K-12³の教育改革や学習支援を担う「アカデミックサポートセンター」と同じ建物内に位置し、学校全体の教育課程と密に連携がとれるようになっている(写真 1 から 3)。創立者の「生涯、読書人たれ。研究の連続者たれ！」(『全人教育』1976 年 3 月号)という学び

¹ 玉川学園の創立者。詳しくは玉川学園のホームページ参照のこと。広島高等師範学校(現広島大学)卒業。また後に、京都帝国大学の文科大学哲学科に進学している。当時の京都帝大の哲学科には、西田幾多郎や波多野精一など、錚々たる顔ぶれが並んでいた。

https://www.tamagawa.jp/introduction/enkaku/history/detail_4517.html

² 「学校図書館」にあたる施設。「図書館」という呼称は、読書センターとしての機能のみが強調されるため、一般的な学校図書館とのイメージの差別化を図る目的で、玉川学園では「MMRC」という名称を用いているのではないかと稿者は推測している。

³ 「K-12」とは、幼稚園から高等学校を卒業するまでの教育期間を指す言葉。

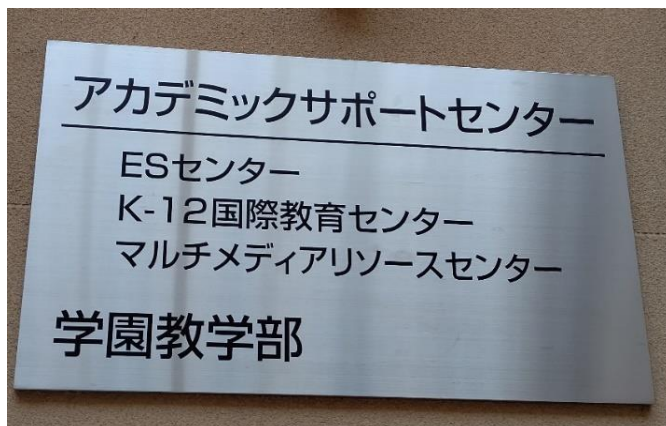
に対する想いや、「単なる土蔵であったり、記念塔であってはならぬ。(略)その団体の脳中枢としての機関でなくてはならぬ」(『學園日記』3号)という図書館に対する思想を今も変わらず受け継ぎ、MMRCは玉川学園の教育の中心として機能している⁴。

(写真1)

ラファエッロ・サンティ

「アテナイの学堂」のレプリカ

アカデミックサポートセンターの建物に到着し階段を降りていくと、その向こう側にはプラトンやアリストテレスらがお目見えする。「ここは学びの殿堂だ」と言わんばかりの象徴的な意匠である。



(写真2) エントランスのプレート

MMRCを運用する母体である「図書・情報活用推進室」はこのアカデミックサポートセンター内にある。司書教諭と事務職とが同じスペースで情報共有しながら仕事をしている。教員と事務とが同じ方向を向きながら仕事をしている印象を受けた。

(写真3) MMRC カウンター

カウンターの背後にある「MMRC」の文字が印象的である。訪問当日は、その文字にサンタクロースがぶら下がっていた。



⁴ 創立者の言葉は「MMRC News Vol.16」(玉川学園,学園マルチメディアリソースセンター編,2016年季刊)の裏表紙からの孫引きである。

学校図書館視察の概要

(視察の日程等)

視察日時 : 2020 年 11 月 12 日(木) 10:00～13:00

本校からの参加者 : 2 名

ご対応いただいた先生(順不同)

アカデミックサポートセンター センター長 伊部 敏之 先生

図書・情報活用推進室 山口 敬子 先生(司書教諭)

徳永 美和子 様

高学年 国語科教諭 後藤 芳文 先生

視察の概要 : MMRC の概要のご説明、MMRC 視察
図書の整備や設備に関する質疑応答

(発見や学び)

- ・毎年 1,000 冊に近い購入と除籍を行っている。血の巡りが良い図書館である。
- ・総合・探究に直結した選書をしている。生徒達の探究のテーマに沿ったものを中心に選書している。(写真 4)



(写真 4)書架での本の並べ方

同じテーマの書架に、絵本、新書、学術文庫、専門書など、様々な形式の本を並べるようにしている。探究するテーマの本を探しに来たときに、同じテーマの他のジャンルに視点が広がるように工夫をしている。

・スペースを有効活用する工夫の一つとして、様々な高さのイスを配置することによって、生徒達の視線が重ならないように工夫している。視線をずらすことによって、利用者の圧迫感を軽減できる。

・通称「わかめテーブル」は、スペースの有効利用や動線確保を考えた結果生まれたテーブル。特注生産とのこと。(写真 5)



(写真 5)わかめテーブル

テーブルの凹んだ部分に人が入りこむので、その後ろは通路としてスペースが確保できる。この「わかめテーブル」が一番低い机となっている。MMRC 内の机の高さはおよそ 3 段階に分かれており、利用者の目線が重ならないよう、工夫されている。

- ・玉川学園には IB コースもあるため、MMRC には英語の多読用の書籍が充実している。
- ・株式会社ニホン・ミツの「切り抜き速報」シリーズは、全種類全点買いを行い、永年保管している。索引検索もできるため、長い時間をかけて点数を増やしていくと、資料価値が高まる(写真 6)。

(写真 6) 「切り抜き速報」

目次・索引検索もできるので、資料の使用価値が高い。保管期間が長くなればなるほど、資料価値も高まる。



- ・論文やレポート作成用のシンキングツール・プリントが置いてある⁵。ちなみに同様のシンキングツールの英語版もプリントとして置いている(写真 7 および 8)。



(写真 7)左 シンキングツール 日本語版

(写真 8)右 シンキングツール 英語版

⁵ 黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕『シンキングツール～考えることを教えたい～』(NPO 法人学習創造フォーラム、2012 年) による。黒上晴夫(関西大学総合情報学部教授)の個人のホームページからもシンキングツールのプリントがダウンロードできる。

- ・MMRC 内のマルチメディアシアターは外から見えるかたちでガラス張りである。
- ・ラーニング・コモンズは次年度以降に稼働予定である。
- ・「まいれふ」⁶という参考文献を整理するアプリを用いて、生徒にレポートや発表の参考文献整理をさせている。また、生徒がまとめた参考文献を、教員が「まいれふ」上で管理している。

おわりに 様々な「コト」が生起する学校図書館を目指して

簡単ではあるが、以上が MMRC の視察報告である。2020 年の視察の総括に代えて、図書館や書店を取り巻く昨今の状況について、以下に稿者の意見を加えたい。

図書館や書店など、およそ本にまつわる業界のトレンドは、やや抽象的に表現すれば、「モノからコトへ」という移行を遂げているように思う。「モノ的世界観」や「コト的世界観」というのは、現代物理学や現代哲学で用いられる用語で、前者は存在するモノ(=物/者)を中心に据えたスタティックな世界観であり、後者は様々な要素の間で生起する一連の関係や事象や出来事(=コト)から世界を考えるダイナミックな世界観である。

図書館や一般書店は従来、「モノ(本)」がどれだけ豊富に取り揃えられているかが、その図書館や書店の価値を決定していた。言い換えれば、所蔵された本の価値そのものが、図書館や書店の価値と考えられていたということであり、それはすなわち、本それ自体の価値を尊ぶことである。

他方で、昨今先進的な取り組みをしている図書館(書店)では、そうした旧来のスタティックな図書館像(書店像)を尊重しつつも、これまでの図書館(書店)の在り方への反省から、本を取り巻く関係性を生み出したり、本との一回性の出会いを演出するような仕掛けを施したりするなど、「関係性」、「体験性」を重視した空間づくりやイベント企画を積極的に行っている。本そのものが持つ価値は尊重しながらも、本が誰に対して価値を持つのか、本が何に対して価値を有するのか、本がどのような場面に対して価値を発揮するのかといった、本の「対他価値」(「使用価値」)も視野に入れながら図書館や書店の運営をしているのである。

こうした本の「対他価値」を尊重することは、必然的に本との出会いを促したり、本を取り巻く人々の交流を促したりすることに繋がる。ビブリオバトル(ビブリオトーク)が近年流行を見せているのも、また、一般書店や図書館にカフェを併設するところが急増したのも、「関係性」や「体験性」を重視し、本との一回性の出会いを演出しようとする、また、本を取り巻く人と人との交流を活性化しようとする図書館司書や書店員の思いの反映であろう。「モノ」の陳列だけではなく、「コト」の演出をもしていくことが、現代の図書館や書店に求められている役割であるといっても過言ではない。(写真9)。

⁶ <http://myref.jp/login.php>



(写真 9)本との一回性の出会いを創出する書店「文喫」

玉川学園 MMRC の視察の際に足を伸ばした書店。2018 年 6 月にオープン。入場料制（平日 1,500 円、土日祝は 1,800 円）の本屋として話題となる。所蔵数約 30,000 点で、冊数は書店として特別に多い冊数ではないが、「本との出会い」をコンセプトに、選書や空間作りを工夫しながら、本との一回性の体験を演出するような空間となっている。六本木という立地や近隣の文化施設のイメージも相俟って、一種「サロン」のような雰囲気醸し出している。「コト」の創出に根ざす書店の一例である。

2020 年にお邪魔した中央大学附属中学校・高等学校、工学院大学附属中学校・高等学校、そして玉川学園中学部・高等部の学校図書館はいずれも、学校全体の教育活動の中に位置し、様々な教育実践と有機的に関係していた。そのため、それらは生徒と本との出会いを創出し、本をめぐる生徒どうしの交流を生み出すような生き生きとした学校図書館として機能していた。これら 3 館の視察を終えた今、稿者の胸中には「単なる土蔵であったり、記念塔であってはならぬ」という小原國芳の言葉が、非常に重要な意味を持って往来している。蓋し文化や価値の継承とは、「千年一日の如く何も変えない」ということを意味しない。文化の継承とは、文化や価値の持つ普遍性を証明するために、時代の特殊性や流行との対決を経ながら、文化や価値を提示する方法を絶えずマイナーチェンジし続けることだと私(稿者)自身は思う。本校の新図書館を単なる土蔵や記念塔としないためには、書籍という本校の文化的資源が、現代の教育的課題とどのように折り合うのかを常に考えながら教育実践を行い、生徒自身と本との間に様々な「コト」(出来事)が生起する学校図書館にする必要がある。このタスクは決して短時間で達成できるようなものではないし、また、決して一人で達成できるものでもないが、たとえ小さなチャレンジであっても、たとえ最初は少人数であっても、教員自身が学校図書館を活用する実践を続けていけば、他には真似できない本校独自の魅力を持った学校図書館を作りあげることができるだろう。

参考資料

- ・『MMRC ユーザズガイド』(玉川学園、学園マルチメディアリソースセンター編、2012 年第 3 版)
- ・「MMRC News Vol.16」(玉川学園、学園マルチメディアリソースセンター編、2016 年季刊)
- ・「MMRC News Vol.22」(玉川学園、学園マルチメディアリソースセンター編、2019 年季刊)
- ・「MMRC 夢の実現に向けて－自ら探究し学ぶ力を育む拠点」
(玉川学園、学園マルチメディアリソースセンター編、2020 年)
- ・ MMRC ホームページ <https://mmrc.tamagawa.jp/>